木材の画像化に抗う

ー　木目を超えた、木材の認知へ　ー

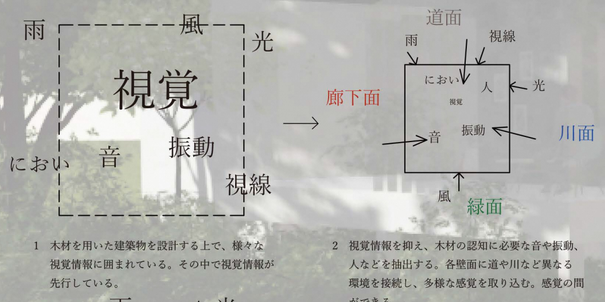
1 CONCEPT

木はいつから画像化したのだろうか。

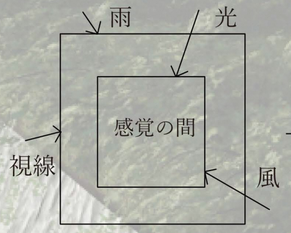
自分たちの周りには木が多い。しかし、木材そのものではないようだ。
木目を印刷した塩ビシート。
木調のアルミルーバー。
そこにあるのは”木 ”ではなく、” 木に見える情報 ” である。
私たちはそれを見た瞬間に、温かい、落ち着く、自然である、と反射的に意味づける。
触れもせず、嗅ぎもせず、その温度を感じることも、時間による変化を見ることもなく、
木を理解したつもりになっている。

本計画では、木材の画像化に抗うため、木目をはじめとする視覚情報を意図的に抑える。
その上で、音、振動、そして人の存在や行為といった、木材や空間を認知するための要素を
抽出する。先行していた視覚情報が抑えられることで、意識は触覚や音、温度といった木が
本来もつ別の性質へと向かっていく。木材は画像として代用することはできるが、それは
視覚情報だけで、香りや温度、感触は生み出さない。本計画は、木材の持つ特性を身体で
経験することにより、住民が視覚にとらわれない ” 木 ” そのものについて理解してもらう
住居となっている。

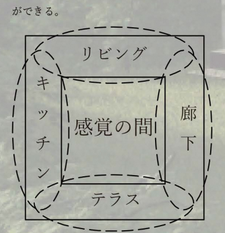
2 DIAGRAM



1　木材を用いた建築物を設計する上で、様々な
視覚情報に囲まれている。その中で視覚情報が
先行している。



2　視覚情報を抑え、木材の認知に必要な音や振動、
人などを抽出する。各壁面に道や川など異なる
環境を接続し、多様な感覚を取り込む。感覚の間
ができる。



3　外部空間へ空間を拡張する。内部の情報を抑え
ながら、中心空間を外部に拡張し、面ごとの
環境に合わせながら生活に必要な風や光を取り込む。

4　拡張した空間（開放の間）にリビングや
キッチン、廊下やテラス空間を差し込み、
快適な空間をつくる。

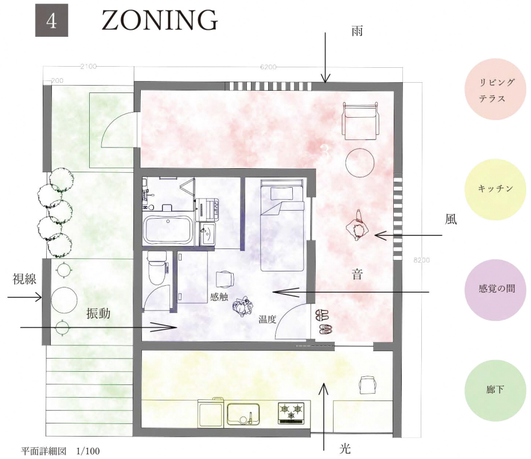
3 SITE

計画地は、近くに公園や川があり、その周囲を山に囲まれた自然環境や生活環境
が隣接する場所である。川からの風や湿気、公園から聞こえる人の声など、多様
な外部環境が重なっており、計画に取り込んでいる。



京都府上高野流田町 8-26 付近

4 ZONING



平面詳細図　1/100

仕上げ材：　木目を弱め、木の質感を残したいので、半造膜型の塗料を使用する。

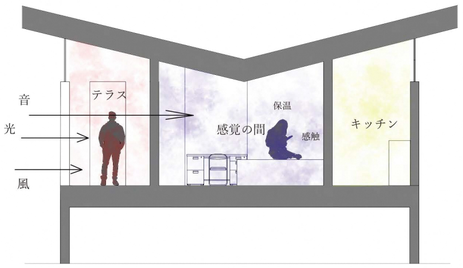
外層：　光や影、人の気配をやわらかく受ける面のため、
　　木下地の上、半造膜型着色塗装仕上げ（白）とする。
内層：　視覚情報を抑え、感覚にシフトする面のため、
　　木下地の上、半造膜型着色塗装仕上げ（黒）とする。



断面図　1/100

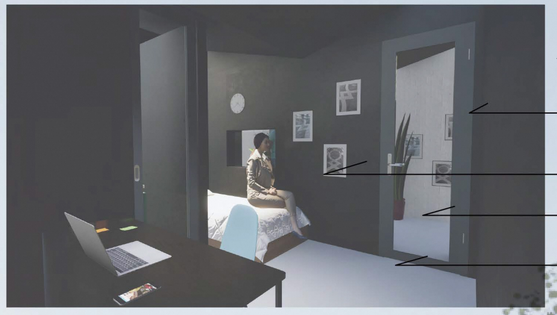
5 SECTION PLAN

外周の層では外環境を積極的に取り入れ、住居に必要な空間を挿入する。
2つの空間を共存させることで、外部に開き快適な生活空間を成り立たせる
空間と、木材を感じることができる感覚の空間を両立させている。





延床面積　290m2



内観パース
上：感覚の間
下：開放の間



感覚の間

音が、他の素材と比べると自然な減衰が発生する。
また、200mm という壁厚ながら振動がある。

外の層が半屋外に対して、この空間は囲まれて
いる。木材の保温性を感じる。

木材のにおいが空間にとどまる。

床の前で靴を脱ぐ。足裏で木材を感じる。

開放の間

ダイレクトに音を受け入れるため、感覚の間と
比較が可能。

テラス空間。この場所で洗濯物を干したり、
くつろぐことができる。

日陰の空間では雨風が気にならない作業が可能。

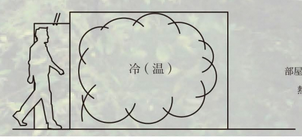


立面図　1/200



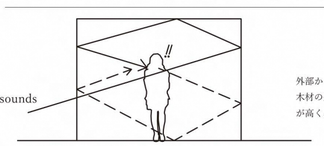
6 EXPERIENCE

外部環境である音や振動、人が感覚の間に入り込み、それらを通して木材を感じる。



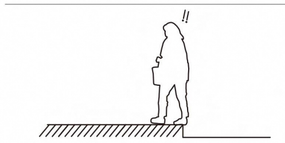
温度

部屋に戻ると、先ほど冷していた（温めていた）空気がまだ保たれている。
熱伝導率が低く、熱を通しにくい。そのため、保温性が実現できる。



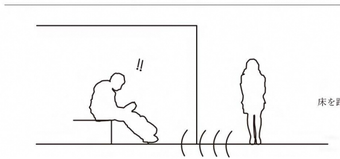
音

外部から取り入れた音や、発した音が良く反射し、部屋の中で反響する。
木材の壁は音を反射する特性がある。木材の密度が高いほど音を遮断する能力
が高く、軽くて多孔質の木材はよく音を吸収するという特徴がある。



感触

開放の間と感覚の間に土足の境界線を設け、土足では体感できなかった
感触を経験する。靴を脱いだ瞬間、木材特有の感触が足裏に伝わる。



振動

床を踏みしめる音や、木材がこすれる音が床を伝って身体に伝わる。